Akita University

秋田大学独自の海外派遣戦略とは何か

—2011年度NAFSA（Association of International Educators）第63回年次大会等への参加から—

牲川　波都季・宮本　律子

0．はじめに

以下は，2011年5月27日から6月4日の日程で実施した，国際交流センター･宮本律子（副センター長）と牲川波都季（准教授）との出張業務内容を報告するものである。主に，夏期の短期英語研修先の候補であるビクトリア大学・英語センターとの協議内容，NAFSA（Association of International Educators）における協定校等との協議内容を概括するとともに，今回の出張報告の結論として「秋田大学独自の海外派遣戦略とは何か」について論じる。

1．出張日程

5月27日　移動：秋田—羽田—成田—カナダ（バンクーバー）
5月28日　訪問：University of British Columbia（バンクーバー）
5月29日　参加：NAFSA（バンクーバー）
5月30日　訪問：University of Victoria，English Language Center（ビクトリア）
5月31日～6月2日
　　参加：NAFSA（バンクーバー）
6月3日～6月4日
　　移動：カナダ—成田—羽田—秋田

2．用務および協議内容

2-1　University of British Columbia訪問

ブリティッシュ･コロンビア大学のメインキャンパスを訪問し，カナダの名門大学のキャンパスの在り方，同窓会組織用オープンキャンパスの開催方法等に関する知見を得た。

2-2　NAFSA参加

2-2-1　NAFSA概要

NAFSA（Association of International Educators）は，1948年にThe National Association of Foreign Student Advisersとして設立された非営利の専門職団体である。年次大会では，世界中から国際教育に関わる専門家が集まり，ブースでの広報活動，各種ワークショップ・セッション開催などが行われる。NAFSAウェブサイトによれば，私たちの参加した2011年度のカナダ・バンクーバーでの大会には9000名近くの参加者があったとされる。

29日は開催日一日目であり，私たちは，登録と必要資料の受理後，本大会参加日程中のスケジュールの詳細について，打ち合わせを行った。

2-2-2　大学間協定校との情報交換および協議

（1）グリフィス大学（オーストラリア）

協定書を更新する際の交換可能な人数と，留学に要するTOEFL点数について，Heidi Piper氏（Manager, Study Abroad and Exchange）と協議した。交換可能な人数については，5月30日にGayle Murry氏（Manager, International Relations）から届いたメールにあった，"the numbers to be normally 2 semester places per year and can negotiate this according to reciprocal demand"という文言について確認し，「原則として，1学期1名，延べ年間2名（同じ学生が1年間滞在した場合は，2名と数える）。この数は，現在グリフィスが学生交換をしているどの大学に対しても基準としているものである。ただし，グリフィス - 秋田大学間で全く同数の人数が交換できるのであれば，交渉によりこの数を越えることも可能である」との返答だった。グリフィス大学は，年度ごとの同数交換原則を厳守しようとしている。AUEP（Akita University Experiential Program，本学で実施している英語による短期留学生用プログラム）などで受入人数を毎年確保すれば，こちらからの派遣人数も確保できる。

また，TOEFLの点数については，ITP（Institutional Testing Program）でもよいが550点という最低必要点数は下げられないとのことだった。また，秋田の学生が何回も別都市までTOEFLを受けに行くのが困難なことは了解しているので，IBT（Internet Based Testing）ではなくITPのスコアを出すのはまったく問題ない。ただし，そのテストが，正規のテストと同じ環境（時間，監督など）で行われている旨を記した文書を送ってほしいという要望を受けた。本学学生にとってITPはIBTよりはるかに簡便かつ安価に受けられるテスト形式であり，留学の機会を増やすことができる。他方で，550点という要件を越えるためには，相当に早期からの準備が必要である。

翌6月1日には再度グリフィス大学のブースを訪問し，グリフィス大学からの留学生の受け入れ時期について確認した。これまでグリフィス大学からは，春（3月）からの来日を希望する者が多かったが，AUEPの本来の開始時期は10月である。Heidi Piper氏に，10月から1年の留学が可能かどうかを確認したところ，制度上は可能であるという返答であった。本学への留学希望者は日本語授業を受講している学生が多いため，その学生特有の事情もあるかもしれないが，10月からの留学を促す余地もありそうだ。

（2）ポハン工科大学（韓国）

本学工学資源学研究科の協定校用入試等の留学プログラム，ポハン工科大学の短期英語プログラムへの派遣可能性について，Joon Lee氏（Program Coordinator, International Relations Office）と協議した。前者については，協定締結以来，学生交換や学生の入学がまだ行われていないこと，本学に留学するとすればどのような形がとりうるかについて，持参した資料を用いて説明した。特に英語による短期留学生プログラム（AUEP）には興味を抱いた様子であり，関係各所で広報するとのことだった。後者については，英語を用いて韓国文化などを学ぶSummer Session Programがあるということだった（TOEFL550点以上が受講条件）。本学には英語を学びたいという学生が多くおり，このSummer Session Programの存在は選択肢の拡大につながると考えられる。問題は，本学学生の多くが，英語を学ぶためには英語圏で，英語圏の文化等を学ばなければならないと考えている点だ。この意識の改革がまずは必要である。

Akita University

（3）セントクラウド州立大学（アメリカ）

Nicole L. Pazdernik氏（Director, Education Abroad），Susan L. Boehm氏（Director, International Admissions）と，セントクラウド州立大学へ本学学生を派遣する際のTOEFLスコアの要件およびそれに達しない場合の措置，同数交換数を越えて学生を派遣したい場合の対応，派遣学生へ伝達すべき事項について説明を受けるとともに，震災への対応状況に関する要望も受けた。また本学からは，AUEPを紹介するなどした。

TOEFLスコアについては，協議前すでに，本学連絡担当者の村上東教授（教育文化学部）の尽力により，今年から新たな基準を適用する旨の合意に達していた。具体的には，留学申請時にはIBTで61，PBTの500-549でよいこと，その代わりにセントクラウド大学に到着後，英語のレベル判定テストを受けること，そのテストに合格しなかった場合は留学生用英語授業とその他の授業とを並行して受ける必要があるという内容である。NAFSAでのミーティングでは，留学申請時にIBTで61に達していない場合の対応策について協議した。その場合は1学期10,000アメリカドルを支払い，Intensive English Center（IEC）で英語を集中的に学ぶ必要がある，その結果レベル4に合格すれば，2学期目から英語以外の授業を受けることができる，合格しなければ引き続き同額でIECで英語を学ぶ必要があるという説明を受けた。1学期10,000ドルの中には授業料以外に寮費など全ての必要諸経費が含まれているものの非常に高額である。セントクラウド州立大学も同数交換の原則を非常に重んじている。協定書上は最大5名までの交換が可能であるが，同数交換原則が基本であり，本学への受け入れ数が1名にとどまればこちらからの派遣も1名しかできないことを強調された。ただし，どうしてももう1名派遣したい場合は，授業料を支払えば受け入れ可能であり，協定があるので授業料は州内からの正規学生と同額の低額（1学期12-15単位で2,500ドルから3,000ドル）になるということである。またこの場合，授業登録を他の学生に先んじて行うことができ（たとえば秋学期のために4月15日から登録開始可能），自分の学びたい授業を優先的に受講できるとのことだった。

また派遣学生が寮を申し込む際には，Lawrence Hallを選ぶことを勧められた。留学生とその他学生の混住形式であり，確実にアメリカ人のルームメイトが得られるとのことである。

最後に，本学留学生に対する緊急時対応計画（Evacuation Plan）の送付を強く要望された。セントクラウド州立大学から本学へは，2010年度2期から2011年1期にかけて1名が留学中である。この留学生は，震災後，いったんアメリカに帰国したものの，その後、ミネソタ州立大学機構の理事会の不許可を振り切る形で，本学に戻ってきた。そのため，本学での今期の取得単位を，セントクラウド州立大学の卒業単位として認められるか否かをめぐり議論があるということである。しかし，ミネソタ州立大学機構の理事会に対し，本学の留学生に対する緊急時対応計画をしめすことができれば，卒業単位として認めることができるようになるということだった。この件に関しては，国際交流センターで急ぎ計画を作成し，宮本からセントクラウド州立大学へ送付することにより対応する予定である（帰国後，送付した）。

本学からセントクラウド州立大学に対しては，センターニュース，アプリーレ（本学広報誌）を渡し，この2年間のセントクラウド州立大学学生の本学での活躍を伝えた。また持参

Akita University

資料でAUEPの授業内容を説明した。特に英語による「日本文化入門」「日本社会入門」といった科目など，全く日本語が使えなくとも留学可能な授業がそろっている点が評価された。

（4）ミズーリ科学技術大学（アメリカ）

ミズーリ科学技術大学は2011年3月に本学と大学間協定を締結した大学である。今回は，Susan Potrafka氏（International Student Advisor），Buffi L. Sidwell氏（International Student Program Manager）と，学部レベルの学生交換の可能性およびミズーリ科学技術大学で行われているダブルディグリープログラムの概要について尋ねるとともに，本学工学資源学研究科で実施されている協定校特別入試を紹介した。

学部レベルの学生交換については，まずミズーリ科学技術大学は明確に理系の大学であり（80パーセントの学生は工学系），文系の学部はあるものの少ない。本学から派遣する場合は工学資源学部または研究科の学生が対象となる。また，交換留学生に求められる英語スコアはTOEFLのIBTで79，IELTSで6.5である（ただし一部の学部はTOEFL・IBTで88・90を要件とする）。また英語で上記スコアを越えて留学したとしても，到着時に大学独自のEnglish Proficiency Testを受験しなければならず，それに合格しなければEnglish Language Programの受講が義務付けられるとのことだった。このことから，本学からの派遣の可能性としては，工学資源学部・研究科の学生が，カナダのビクトリア大学などで相当の英語力を身に付けた後，交換留学生として1学期または1年間留学するという道が考えられる。ミズーリ科学技術大学は安全な場所にあり，四季もあるなど，本学学生にとって生活環境は適していると思う。

ダブルディグリープログラムについては，特に学部レベルについて現状をご教授いただいた。現在，中国の二つの大学，アフリカのボツワナ大学との間で，ダブルディグリープログラムを実施しており，形態としては2＋2（2年間は本属大学で2年間はミズーリ科学技術大学で単位取得）または3＋2（3年間は本属大学で2年間はミズーリ科学技術大学で単位取得）という形をとっているとのことである。今回，ダブルディグリープログラムについて協議した留学生プログラムマネージャーのSidwell氏は学部レベル担当であり，大学院レベルについては，担当のJeanie Hofer氏から後日メールにて回答が得られる予定である。

本学への留学生受入については，AUEPを紹介し，日本語を全く学んだことのない学生でも，また学部・大学院生を問わず留学可能であることを強調した。ミズーリ科学技術大学には日本語学科がないので，全くの初心者も受け入れられ，かつ英語による日本文化・社会入門クラスを備えたAUEPは高く評価された。ミズーリ科学技術大学から留学生を受け入れることができれば，工学資源学部所属のAUEP学生が生まれることとなり，参加留学生の多様化に貢献してくれることだろう。ただしAUEP参加者のための日本学生支援機構の奨学金は，学生交流の実績のある協定校からの留学生に限定されている。したがって，ミズーリ科学技術大学からの留学生をAUEPに初めて受け入れる際には，奨学金は給付できない（2年目からは給付資格を得られる）。今回の協議ではこの点について伝えなかったので，ミズーリ科学技術大学からAUEP参加の打診があれば先方に伝えたほうがよい。

最後に，ミズーリ科学技術大学では2011年9月25日にCelebrating Nationという国際交流行事が予定されており，訪問する機会があればこの時に訪問日程を合わせるよう勧められたことを申し添えておく。

Akita University

2-2-3　協定校候補校との情報交換および協議

（1）ロジャー・ウィリアムス大学（アメリカ）

ロジャー・ウィリアムス大学は，2011年1月にメールにて，本学への訪問と協定締結の希望を伝えてきた大学である。当初は5月終わりまたは6月初めの訪問を予定しているとのことだったが，震災後宮本から，訪問の延期も問題ない，また本学からNAFSAに参加するのでそこでお会いできると連絡したところ，延期はありがたい，NAFSAで会おうという返信であった。

そして今回，会場にて，Guilan Wang氏（Assistant Provost, Global Affairs）と会い，両大学の学部の紹介，学生・教員の交換可能性について協議した。ロジャー・ウィリアムス大学は，学生数5500人の小規模私立大学で7学部をもち，修士号が取得可能である。

ロジャー・ウィリアムス大学は，国際化に関する大規模予算を得，特に現在の学長の意向により，Asian Studiesの充実を目指しているということであり，日本の大学，1から2校との協定締結を目指しているということだった。特に交流の内容としては，Asian Studiesを中心とした研究者交流を要望された。

本学からは，短期・長期の派遣について質問し，短期については本学のために1カ月の英語・文化研修を特別に組むことは可能である，また長期についてはTOEFLのPBT550が必要要件であるとの返答を得た。また，受入に関してはAUEPを紹介した。

先方は協定締結や来年以降の相互大学訪問についても前向きではあったが，なぜ特に本学と協定を結びたいのかが明確にはつかみえなかった。国際教養大学と違う大学であるとの認識はあったが，最初に誤って本学にコンタクトをとってきたという疑念もぬぐいきれなかった。今後積極的に交流を進めていくか否かは，ロジャー・ウィリアムス大学からのアプローチの仕方を吟味した上で慎重に判断してく必要があると思われる。なお，翌日の横浜国立大学との情報交換では，このロジャー・ウィリアムス大学と横浜国立大学との間でも協定を締結しようという話があり，2011年6月に訪問の予定があるという情報を得た。本学へは訪問予定があるという連絡は来ておらず，このことからも本学との協定締結をどこまで重視しているのかに疑問が残った。

（2）シドニー工科大学（オーストラリア）

横浜国立大学の教職員との情報交換から得た情報をもとに，本学からの学生派遣と，日本語学科からの学生受け入れの可能性を探るため，シドニー工科大学のブースを訪問し、Liz Treacy氏（Coordinator, International Exchange）と協議した。その結果，すでに日本の大学との間で多数協定を締結しており，新たな締結は考えていないという返答だった。AUEPを説明すると，日本語学科の責任者に紹介してくれるとのことだったが，横浜国立大学が協定を締結した当時とはかなり状況が変化しており，学生交換の可能性は低いと考えられる。

2-2-4　日本国内他大学との情報交換

（1）横浜国立大学

留学生センター・短期プログラム担当の長谷川健治准教授と学務部教務課留学生交流係の斎藤秀人氏と，短期プログラムの内容と学生リクルート方法について情報交換を行った。

Akita University

また，本学学生の派遣先となりうる英語圏の大学を探していると相談したところ，シドニー工科大学とユタ州立大学の推薦を受けた。両大学とも学生の質が確かであり特にシドニー工科大学については，横浜国立大学が協定を締結した当初は，日本語学科からの学生派遣先を探していたとの情報を得た。

横浜国立大学は短期プログラム担当の専任教員と，協定校とのこれまでのやりとりや協議のポイントを把握した事務職員との2名をNAFSAに派遣していた。お互いの職責が明確で，相互に情報を補う形でNAFSAの場を有効に利用しているようだった。本学からも，来年以降は教員と事務職員とで参加することを検討してもよいと思われる。

（2）大阪学院大学

5月31日に一度JAFSAのブースに出展していた大阪学院大学を訪問していたが，セントクラウド州立大学からの緊急避難計画（Evacuation Plan）提示の要望を受け，そうした計画を独自に作成したという大阪学院大学の熊井知美助教（国際センター，留学生受け入れコーディネーター）と再度情報交換した。大阪学院大学によれば，関西に位置する大学にも震災の影響があり，留学生数が減少する，減少する恐れがあるという状況が広がっているという。そのため，大阪学院大学は，一人ひとりの留学生の国外退去方法までを含めた緊急避難計画を作り，留学生や協定校等に安全性をアピールしているとのことである。熊井助教が作成したとのことで，参考のため後日メールで送付してもらう約束をした。また本学でも，震災後，ウェブサイトで緊急連絡を通知したことを話しその内容が役に立てるかもしれないと伝えた。

2-2-5　日本特別セッション（主催：JAFSA，共催：文部科学省）

本大会では，東日本大震災後の留学生受け入れの現状を発信すべく，"Japan's Response to the March 11 Earthquake, Tsunami and Fukushima Accident" と題し，日本特別セッション（主催：JAFSA，共催：文部科学省共催）が開催された。

会場には約180名程度の参加者が集まったとのことで，日本の大学関係者を中心に立ち見が出るほどの来場者がいた。東北大学の報告では，現在大学全体で活発な対応活動を行っていることが示され，大学独自の努力がうかがわれた。他方，文部科学省の報告は原発・放射線・政策決定についての現状報告（実際に多数の留学生が日本に戻ってきている，福島第一原発からの立ち入り禁止区域内に大学はない，周辺の放射線量積算値等）と，国費留学生への帰日航空券費用支援など，文部科学省の行っている援助政策を述べるにとどまり，私たちが期待していた日本としての留学生への安全宣言はなかった。どこからどこまでがどのように危険で，どこからが完全に安全だ，あるいは安全になるとの宣言がなければ，留学生受け入れ担当者が留学生の安全を完全に保障することは難しい。会場からも，大学の個別対応ではなく，政府レベルでの対応を組織的に行ってほしい旨の意見があがっていた。

2-3　University of Victoria，English Language Center訪問

University of Victoria（＝U-VIC）・英語センターへは，2011年9月，「秋田大学海外短期研修支援事業」を利用し5名の学生を派遣する予定であるため，学生の勉学・生活環境を

Akita University

把握するために訪問した。

午前中は，Kyla Jardin氏（International Marketing Coordinator）の案内による，キャンパスツアーに参加し，英語センター所属の留学生に関わりのある各所を見学した。具体的には，図書館，学生生活のセンター，学生寮，寮の総合案内所，ボランティアとの英語学習スペースを見学した。9月の本学からの派遣に関しては全員ホームステイとなるので寮は使わないが，7月・8月のプログラムに参加する場合は寮に滞在することになる。

寮には電気ポットや電子レンジ（共用）以外の自炊設備はなく，学生用のカフェテリアで食事をするとのことだった。一室には机・ベッド・クローゼット・暖房設備が付属し４畳ほどの広さに見えた。シャワーは5室ほどで共同使用するとのこと。管理を単純にすべく個室にも共用スペースにも火気を使用した設備を置かないという点，部屋数確保のためにシャワーを共用としている点は，本学での今後の寮新築・改築にあたり参考にすべきである。

また，見学した英語学習スペースでは，留学生がボランティアから個別に宿題や会話練習の支援を受けていた。ボランティアは登録制であり，教員を退職した人などが多いため，語学学習においても忍耐強いとのことだった。地域住民の能力が有効に活用されている。それも，ボランティアを差配する専門職員の配置があってのことだろうが，本学でも将来的には実施を検討したい学習スペースだった。なお，このスペースは３カ月以上のプログラム参加者のみ利用可能であり，本学からの夏の短期研修では残念ながら利用できないということである。

昼食時には，Jacqueline Prowse氏（Director, Long-term programs），Lily Chow氏（Senior Program Coordinator）と協議した。主な協議内容は，英語学習を目的とする学生の長期派遣（１学期または１年単位）と，英語プログラムの内容についてである。

授業料免除をめざし協定締結の可能性を打診したが，協定を締結するとすれば特定学部が中心となって行うことになっており，英語センター所属の教職員にできることはない，すでに日本の大学とは多数協定を締結しているという説明があり，その場での進展はなかった。

他方で有料であれば，短期・長期に関わらず英語センターで受け入れは可能であるということだった。本学学生にとって授業料が最も問題だという点を伝えたところ，今年から始まったCanadian Experience Internship Program（CEIP）であれば，前半の半年は英語授業，後半の半年は有給で英語を使いながら仕事をするというプログラムであり，英語授業のみの通常プログラムよりはるかに低料金でかつ有意義な英語留学となりうるという返答を得た。通常の授業料金は1カ月で1,600カナダドル，3カ月で3,700カナダドルだが，CEIPであれば12カ月8,900カナダドル（約72万円）となる（このほかに月800カナダドルのホームステイ料金がかかる）。また後半のインターンシップでは，月1,200-1,600カナダドルの収入が見込めるため，ホームステイ料金や授業料を相当に補いうる。本学の学生にも，実際に参加可能なプログラムである。なお，後半のインターンシップに移るためには，前半の英語授業で中上級レベルクラスに合格するか，合格しない場合は担当教員から，生活態度などを含めた高い評価を得ることが条件であり，その条件に達しなければ引き続き英語授業を受講することになるということだった。ただしこの場合の後半の英語授業料も，

Akita University

8,900カナダドルに含まれており追加の徴収はない。

英語プログラムについては，全6レベルで，1クラス18名以下の受講生に抑えられており，50名の専任教員とその他多数の非常勤教員とが担当しているということだった。午後には，宮本と牲川がそれぞれ別の英語クラス（中級）を20分ほど見学し，少人数でよく設計された質の高い英語授業が行われていることを確認した。

キャンパス訪問後は，周辺の留学生生活圏を見学し，安全かつ便利な地域であることを確かめた。

なお，この訪問に関しては，U-VICとの日程調整，空港送迎なども含めた当日の案内など，全面的に林大輔氏（T&D Victoria Support Center）にお世話になった。林氏からは，夏の派遣に関するアドバイスもあり，空港までの各ホームステイ家族による送迎はバンクーバー空港ではなく，ビクトリアのバス停またはビクトリア空港までであり，秋田からビクトリア空港までの往復航空券を準備するのが最も便利だという助言を得た。

3．総括―秋田大学独自の海外派遣戦略とは何か―

今回はNAFSAに本学ブースを出展しなかったが，学生交換の方法や可能性について各大学の担当者と直接顔を合わせて具体的な協議・情報交換を行うことができ，非常に有意義であった。

特に，2011年夏に学生短期研修を実施するビクトリア大学を訪れ，英語プログラムや学生の生活環境を確認できたことは，責任をもって短期研修を進めていくための基礎となった。さらにこのビクトリア大学では，Canadian Experience Internship Programという本学学生にとって留学可能なプログラムの情報を得ることができた。新たな英語圏への派遣先開拓が今回の出張の主目的の一つであり，この点で成果があったと言える。

また，グリフィス大学，ポハン工科大学，セントクラウド州立大学，ミズーリ科学技術大学という大学間協定校の国際交流関係者との協議では，学生交換人数や英語スコアに対する各大学の方針やプログラム内容を知ることができ，また本学のAUEPについて情報提供することができた。協定校との交流を実質的なものとして続けていくためには，内容の詳細や方針の実際を知ることが必要であり，協定校の各連絡担当者および国際交流センターの教職員が直接顔を合わせて協議する機会の必要性を再認識した。

新たな協定締結候補校としては，先のビクトリア大学も含め，ロジャー・ウィリアムス大学，シドニー工科大学と話し合いの機会をもったが，ビクトリア大学については有料の英語プログラムへの参加をまずは進めていきたい。ロジャー・ウィリアムス大学については協定締結も決して不可能ではないという感触ではあったが，なぜ本学と特に協定を結びたいのかという部分に確信が持てず，先方のアプローチの仕方を見守る必要があると思われる。シドニー工科大学については現状では協定締結の見込みは薄い。

今回数多くの英語圏の大学と協議して感じたことは，それらの大学は総じて，協定締結校を今以上に増やしたいという気持ちは持っていないということである。また留学生の交換に関しては，同数交換を厳守しており，要件となる英語スコアを下げる見込みもない。一方，英語を学びたい，使えるようになりたいという本学学生の希望は高まるばかりである。短期的に見てこの状況を解決する方法は，以下のとおりである。

Akita University

（1）英語圏の現協定大学から本学への受け入れ数を増やすことで，本学からの派遣人数も確保する。そのために、本学のAUEPの内容を英語圏の学生にとってさらに魅力的なものに充実させていく必要がある。

（2）本学学生を対象とした留学説明会等で，英語圏への留学要件であるTOEFLスコアとそれに至る困難を繰り返し訴え，早くからの準備を促す。ALL Rooms（教育推進総合センター開設の自律学習支援システム）を利用しての自習，留学生との会話など本学にいながらできる自律学習を促さなければならない。

（3）自律学習を補足する形で，U-VICやクライストチャーチ・ポリテクニク工科大学などでの海外での英語集中コースを紹介し，受講を促す。

（4）英語圏の協定校ではなく，U-VICのCEIP英語プログラムなどへの1年間の留学を勧める。

（5）授業媒介語として英語を使用している，欧州・韓国・アフリカ等の協定校への留学を促す。

以上をまとめると、本学学生には，求められるTOEFLのスコアが非常に高い英語圏の大学への長期留学を「夢想」するのではなく、短期の語学研修などのステップを踏んで英語を学ぶよう促すことが重要であるということである。そしてさらに重要なことは、本学が高等教育機関であることからすれば，英語を学ぶ機会の拡大のみならず，そもそも，なぜ英語を学びたいのか，なぜ特にネイティブの英語を学びたいのかを学生に問いつつ，さらに，学習対象となる言語と学生が自己の未来を創ることとの関係を問いなおしていく必要があろう。その中で，英語以外の言語を学ぶという選択肢，（5）のように英語を第一言語としない地域での英語学習という選択肢，あるいは語学ではなく全く異なる学習目的についての発見を促したい。

言語学習とは，何かを達成するため，誰かと関係を創るための手段であって，それ自体を目的とすることは不可能である。また外国語を流暢に操る能力をもつこと自体が，他者との関係づくりや社会活動の成功に直接つながるものではない。このように言語学習の意味を根本から問い直すプロセスを重視し，あえて英語圏以外に焦点をあて，そこで学生それぞれの目的達成を確実に目指させるといった目標を立てるなら，それは他のどの大学とも異なる本学独自の海外派遣理念として主張していくことができると思われる。